
鳩

L.B.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳩

【ZPDF】

Z9036D

【作者名】

L・B・

【あらすじ】

主人公戒森風馬えびすもりふうまが、朝目覚めたとき、辺りには沢山の鳥の羽と一つの糞が。風馬のその日一日はとても長く、くたびれるものだった。三十に近い男の、ちょっとした成長物語。

昨晩は三月にしては暑く寝苦しい夜で、私は部屋の窓を開け放して寝た。

そのおかげでよく寝られたのだが

今朝目覚め

起き上がろうと身をひねつた目線の先の机の上（文机なので寝床とそう高さが変わらないのだ）に、まだそう古くは無い鳥の糞が一つ落ちていた。梟でもない限り、夜中に鳥は飛ばないだろ、

鳩か雀かが朝方にでも迷い込んだかと辺りを見渡したら枕元から掛け布団、地べた、欄間に至るまでどうして真っ先に気づかなかつたかと思つくりこの羽毛・羽だらけだつた。

これは、外に出ようとしてあがいた跡か。

羽の大きさからすると鳩だらう、

部屋に鳥がいるようには思われなかつたので

無事に逃げられたのだろうかと

私は開け放たれた窓の外を見やつた。

「里、里」

私は階段を下りながら、使用人の里を呼んだ。

この里が、もういい歳なのだが働き者で、よく気が利く。

うちでは長いこと働いている。私が物心付いたころには既にいた記憶がある。

阿波の女はよう働く、と父がいつも感心していた。

「はあい、少々お待ちくださいまし」

声も大きい。

あの声、誰が聞いても厨から叫んでいるようには聞こえまい。

（厨は私のいる階段からは、居間の向こうの一部屋をはさんでそのまた先の角を曲がってガラス戸を隔てた先にあり、戒森家がそんなに立派な家だと自慢するわけではないが、つまり、かなりな距離があるわけだ）

「はいはいたいま、風馬坊ちやま」

ぱたぱたと里の急ぐ足音が近づいてくる。

里は、私がいくつになつても坊ちやまと呼ぶ。

最近はもう慣れてしまつたが、学生のころは友人によくからかわれた。

何度も坊ちやまと呼ぶのを止めろといつたが、

里は、「私にとつて坊ちやまは坊ちやまですかり」と言つて聞かなかつた。

昔の私は、家が金持ちであることを自分の手柄のよひに自慢する、考えの浅いそれこそお坊ちやまだつたのだが、

里はそんな私の伸びた鼻を折る役割をしてくれていた。

いつまでたつても坊ちやまと呼ぶのは、その名残だ。

「おはようじや、い、ます」

私は階段を下りきつたところで里を待つていたのだが、

里は私を見るなり言葉を失い顔面蒼白になつた。

「坊ちやま、どうなさつたんですそのお顔

はて、どうなさつたんですと言われ思ひ当たる節は一つだが自分の顔が一体どうなさつたのだろうかと、洗面所に急いだ。

「これはこれは」

自分の顔を見て驚愕した。むしろ笑みさえこぼれた。

必死だったのだなあ

鏡に写つた私の顔は血だらけで、顔中に赤い引っかき傷と、蚯蚓腫れが出来ている。

よくも気づかず寝ていたものだ

まあ、顔は傷の深さに反してよく血が出るからたいしたことがない

のは分かるが。

「ばたばたばたと、里は急いで湯を張つた桶と真つ白な手ぬぐいを持つてきた。

「氣の利く女だ。

「ねずみですか」

「どこかかじられてはいませんかと里は私の腕や背中をさすつた。

「いや、鳩だよ。昨日窓を開け放して寝てしまつたんだ
里の持つててくれた手ぬぐいで顔を拭くと、だいぶ見られるようになつた。

湯の熱で、やつと、顔が痛みを感じ出した。

ひりひりとしみる。

「鳩ですか、まあ、まあまあ呆れた、あらほんと」

そして私の頭についた鳥の羽毛を見つけ、はらはら落とした。

「坊ちやま、そんなお顔で今日はびつわれるおつもつです
と、ため息混じりに言い残し

そのまま掃除道具を持って一階に上がつた。

氣の利く女だ、と再度感心した。

お坊ちやまの頭に羽毛が付いていたのを見ただけで、お坊ちやまの部屋は鳥の毛で散乱していると読んだのだろう。すぐに掃除に行くことは。

しかし、消毒液か何かは無いものか

さすがのお里もそこまでは考え方なかつたかと勝手に勝ち誇つた
気持ちになり、

消毒液を探しに行こうと後ろを振り返ると

両手に消毒液と絆創膏を抱え怒りに震える父の姿があつた。

「お前、里に大怪我ですと言われ飛んできてみれば
里、本当によく、氣が利く。むしろ氣を回すがわる。
父に知らせるとば。

「呑氣だな、」

父は消毒液と絆創膏を私に押し付けると、腕組みをし、私を睨んだ。彼はもう六十を過ぎているが、父親とはいっても威厳があるもので、

三十前の私でさえ、睨まれるとひるんだ。

「今日は、何月、何日、だ」

「三月、十四日です」

父の目が、私の全身を刺すように見回した。

「今日は、大切な日だと、あれほど、あれほど」

父の声には憤怒と呆れと落胆が入り混じっていた。

はて、先ほどの里といい、父といい、今日が一体何の日だというのだとしらばくれるのには、私は念を押されすぎていた。

昨日言われたことを忘れるほどであれば病院に行かなければなるまい。

いや、正確に言おう、五日前に親同士で盛り上がり、三日前に日取りが決まり、つい昨日日本人たちに知らされた見合い話について、だ。父の言葉を背に私は鏡に向き直り、顔全体に消毒液をつけ一番痛みを感じる左目の下の三本の傷に大きな絆創膏を一枚貼った。なんとも情けない顔である。

絆創膏に引っ張られ、左目が細く、視界も狭く見える。

これでは殴られた傷を隠しているようではないか

しかも、その他顔中の引っかき傷に蚯蚓腫れ

女がらみだと、誰が思わないことがある。

いや、違うのですとの訂正も、言い訳にしか聞くまい。

里や父は今日の日にそれを心配しているのだ

見合いに女傷を残して行けば波風が立つと。

まあ、戒森家に変な噂が立ともそれは私には関係の無いことだ。

逆に鳩にやられましたと正直言つてはどうだうか

なんとも間抜けな話になるな。

偶然開けた窓から朝方偶然鳥が入り偶然顔中を引っ搔き回して出で行つたのです

この田の下の絆創膏は三本の鳥の爪あとを隠しているのです、『J覧』になりますかと言えば

私は笑いものにされるだろうか。

おい聞いているのか風馬、と父は私を呼んだが、私は
「仕方ありませんね、化粧でもして隠しておきましょうか」と答えておいた。

父はそれ以上何も言わず、時間にだけは遅れるなよと、去つて行つた。

私が、化粧なんてして行きやしないと思つて何も言わなかつたのではなく、多少何があつてもこの見合ひの話が破談になる、なんてことはないと分かつてゐるから、何も言わなかつたのである。

つまり、見合いとはただの顔合わせ。

結婚前提の話なのだ。

深く聞くと、早いほうがいいからと、式の田まで決まつてゐるそうだ。

本人たちは蚊帳の外。

さて私の未来の奥方は一体どんな人なのであらうか。

「結婚する前に相手の方のお顔が分かるなんてうらやましいですよ」昨日、勝手な結婚話を里に愚痴ると、帰つてきた返事がそれだつた。里は、「いいじゃありませんか、里なんて結婚式の日が初顔合わせでしたよ、昔はそれが普通だつたんですから。時代も変わつたものですねえ」と。

そして嫁いだ先の亭主が酒乱で苦労し、とうとう一年も経たず飛び出してきたのだとか。

戒森のお家には良くしていただいて、ありがたいことです

里はいつも父に感謝していた。

着の身着のままで家の前で倒れていた里を見つけた父に、何も言わず食事を与えられ、働き口が無いのならどうちで働かせてもらえることになつたそうだ。

私は、里の身の上話を聞いたのはそれが初めてだったの、いやそれか驚いた。

そぞろに歩き回る間に少しづつ體くことになつたのかと思性没くなつてしまつたが、

いやいや、論点からずれてしまつていた。むしろ相手の性格を知らずこ結婚すると

むしろ相手の性格を知らずに結婚するということ自体に間違いがある

「誰か他に好きあつている方がいらっしゃるわけでもないんでしょう。坊ちゃん、顔は悪くないんですけどねえ、どうしておもてにならぬのか。お酒飲まれないから結婚しても酒乱で奥様に逃げられることも無いですね。性格なんて分からなくとも嫌われることは無いですよ。ただ喜怒哀楽も少ないですしあまり口数も多くは無いでしょう。いえ、私は味があると思つんですけどね。そこがつまらないといって飽きられるかも」

そこまで言って言い過ぎたというようにほほほ、忙しい忙しいと笑つて里は逃げていった。

確かに、私は物事を素直に受け止める性質で、喜怒哀楽が表に出にくいが、

さすがに一生を共にする女性についてだ、神経質にもなるだらけ。
「坊ちやが、いつまで顔をいじつていらっしゃるんです、余計ひどく
なつますよ」

一階から降りてきた里は掃除道具を片付けながらそう言った。

文机の上、糞が落ちていましたよ、あの「じゅりゅうじゅりゅう」した書籍に付かなくて幸いでしたねと笑った。

「あらあ、あなたどうなさつたのそのお顔。絆創膏が田立つて大して男前でもない顔が台無しですわよ。まあ、引っかき傷ね。女性、なんてことは無いわね。そんな甲斐性なさそうだもの。大方鳥の巣

にでも頭を突っ込んだんじゃあ無くて」

ほつほつほど、見合い席に向かう廊下でけたたましく女性に話しかけられた。

見知らぬ女性にここまで唐突に、傍若無人に話しかけられたことが無かつたので

少し戸惑っていると、

その方がお前の見合い相手だと、となりにいたその母親らしき女性は青ざめていた。

「あら、写真で見たのと多少感じが違うようだつたからわからなかつたわ。あなたがそうなの。まあ失礼、ごめんなさい。私思つたことをすぐ口に出してしまうの。正直なのよ、嘘がつけないの。一人つ子じやない。甘やかされて育つたもんだから。気になつたことをすぐ確かめたくなるのも性格なのよ。気にしないで頂戴、傷ついたなら謝るわ」

そのまま、一緒に見合い席へ向かつたのだが、いつまでたつてもその女性のおしゃべりは止まらなかつた。

「自己紹介なんていらないわよ、私昨日お母様から聞いたもの。あなたもそうでしそう、あら、聞いてないの。仕方が無いわねえ、と、言つかこの席でいつたい何を話せばいいのかしら。趣味の話、何て面白くないわ。どうせあなた無趣味でしょ」

「年を聞いたら、私よりも十も年下だという。

二人だけで話す時間も設けられたのだが、その女性は、くるくると動き回り、また他愛も無い話を一人でしゃべり続けた。

見合いが終わつた後、父は元気なお嬢さんだと苦笑し、相手の「両親は頭を抱え、恐縮していた。

私は、話している間中握り締められたままの彼女の手を見て、彼女に好感を覚えた。

十も上の見知らぬ男に嫁ぐのだ。いささか心配もあるだろう。おしゃべりはそれを見せまいとの強がりで

私も少しは女心が読めるようになつたか、と

家に帰つて里に見合いの一部始終を話したら、里は、まだまだですよと、落胆したような表情を見せ、私の首を傾げさせた。

そして、父は縁談を取りやめたとその日のうちに私に伝えた。
「ううしたんです、いい子だつたじやありませんかと呑気に答える私に、父は里と同じ落胆した表情を見せた。

「お前、本当に、分からなかつたのか」

父さんも里も、何だというんです、私だけ馬鹿のように

「先様も、駆け落ちでもされる前に止めましょうかと行つて連絡してきたのだぞ」

あ、

ああ、ああ、ああ、そうでしたか、そうですか、そうですか
私は間抜けな顔で、間抜けな声を出していた。

「それだから、駄目なのですよ、」

笑い涙か何なのかとりあえず涙を拭きながら里が入ってきた。

「女心が読めなさ過ぎですよ。相手の方だつて、戒森家に嫁ぐことは名誉ですよ。好きあつている方がいらっしゃつたとしても坊ちゃんは結婚したでしよう。不倫だつてなんだつて出来たでしようし。
なんせお若いんですからね。ですが、どうして敢えてそれを選ばなかつたか。お分かりですか。どうせ坊ちゃんは、その女性が話している間中、静かにその話を聞いていたのでしょう。失礼なことを言われても気づかなかつたのでしょう。彼女は緊張しておしゃべりが過ぎたのではありませんよ、嫌われようとしてそうしたのです。坊ちゃんが彼女を嫌つて破談になつてくれるのが一番なのですから。
まあ、簡単に破談になつたりはしませんけど。それでも坊ちゃんが怒りもせずにうんうんと聞いているもんですから、相手も苛立つたのでしょう。つまり、ええ、こんな間抜けな男性に嫁いで不倫するには、あまりに自分たちがお天道様に背く行為をしようとしていると思わされ胸を痛めないではいられなかつたのですよ。胸を傷めるところかむしろがつかりだつたんじやないでしょかねえ。こんな

何でも許しそうな男に嫁ぐのかと。坊ちゃんをお生みになつてすぐ奥様が無くなつて。里や周りの婆に甘やかされて育つてしまつたので、女心を知る機会が無かつたのですよねえ。ああ、それだけは本当に里の不覚です。ここまでくると相手の女性が不憫ですわ。ええ、坊ちゃん、聞いておいでですか、坊ちゃん」

ええと、つまり、

里の話を要約すると、私は不倫という手段を結婚前から諦められるような、優しそうな男だというのか、間抜けな男だと言うのだな。見てきたわけでもないのに、里はよく状況がわかるなど、頭の隅では別のことを考えていた。

しかし、また、何とも言えない。

傷つくことさえできないというか、

むしろ悲しむべきは勝手に縁談を進めていたはずの親たちさえも諦めさせた原因が自分だということだな。

あれほど勝手急に縁談に結婚話を取り付けた父達が、何を言つても強引に話を進めようとした父達が、その口のつちに取りやめたのだから。

それはそれで、物凄く、むしろ、才能に近い。

などとぶつぶつと、考えてみても、出来事を反芻してみても怒りさえ覚えないのだから、

これほど里にとやかく言われても、父に呆れられても、何とも、思わない。

問題は私だといわれても仕方あるまい。

私は。

何だ。

そんな自分に、心が挫けそうだった。

心に多少の打撃を受けた私は、自分について少し不安になつた。

そして、喜怒哀楽に無縁だつた自分を、不幸に思つた。

「父さん、戒森家が断絶したら、すいません」

と、私はとぼとぼと自室に向かう階段に足をかけた。

「それでも、仕方がないと、思われるを得んな
父は、鈍感すぎる私を、怒るでもなく、ただ、ふがいなそつそつ
言つた。

「旦那様、それでは坊ちゃんが可哀相過ぎますよ

里、可哀相と言つたか、失礼な。

まだこれを機に何か変わるかもしませんよ、などと言つていたの
を耳の端に、私は部屋に入り、電気もつけずに寝床へ倒れこんだ。
里に掃除をしてもらつてから入つていなかつたが、鳥の羽どころか、
埃一つ舞わない。

やはり里は、さすがだな。掃除も熟練者だ。

今日は、色々あつた。

鳩に部屋を荒らされるわ

糞を落とされるわ

顔を引っかかるわ

(もう痛くない、ただ、引っかれたところが盛り上がり、さわ
り心地が悪い。絆創膏は、剥がそうとしたが、剥がれない。明日に
でも、風呂に入つた折に剥がそう。無理に剥がせば傷に触る)

里や父には朝からやかましくされるわ

見合い相手には失礼なことを言われるわ

破談になるわ

そしてまた、里や父に呆れられるわ

何か、変わるだらうか、私は

今日を振り返つてうとうとし始める

思考が散漫になる。

窓、を開けなくとも今日は寝心地がいい

明日は、月曜日、か

薄れ行く意識の中で、窓の外からかりかりと窓硝子を擦る音が聞こえた

あれは、何だ、ねずみか

いやまさか、な

完全に眠りについた時、聞こえたのは羽音か、泣き声か

翌日、目を覚ましたとき、

私は背広を着たままだつたと後悔した。

いつもより目覚めが早い。

さすがに三月、寒さで体が縮こまつてゐる、それで起きたのだろう。

まだうす暗闇だなど、窓を見上げた。

「そういえば、」

昨日のあれは、何だつたのか

電気をつけ、真ん中から外に向かつて開くようになつてゐる窓の左側部分を少し開けてみる。

やはり、寒いな

音は、右側の、と、窓の外枠をみてみると、何かが引っかいた後が見える。

これは相当な、強さだな

夜、だつたはず

ならば、やはり、梟か。

何のために梟が私の部屋を訪れたのかは分からぬが、昨日の部屋を荒らした犯人も、実は梟かも知れないな

そう思つと、なぜか腹のそこから笑いがこみ上げてきた。

はつはつはつは、と笑つていると、下から里の声が聞こえた。
そうまだまだ早朝だつたなど、私は頭を搔いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9036d/>

鳩

2010年11月24日07時53分発行